

レゾリュートの近く。氷の下は海だ。  
速くに堀江さんの氷上ヨットがかすんで見える。

ただし、そのリーバイが毎年一度、確実に尊敬を集める行事がある。レゾリュートの町はすれに、カナダ空軍のサバイバル訓練所があり、リーバイはそこで若い軍人たちに、イグルーの作り方を教えているのだ。

イグルー。古い教科書に「エスキモーの家」というふうに紹介されていたこの丸い氷の家は、とうに過去のものとなった。イヌビツクの町で、イグルーの写真を撮ろうと考えた日本人カメラマンは、二十年前に会い、とエスキモーに笑われたという。

しかし、イグルーそのものは、住居としてきわめて快適である。北緯八二度五分、エルズメア島ヘクラ岬に設置した

日大隊のベースキャンプで、私は三週間のイグルー生活を送り、その保温性の良さ、堅牢さに感嘆したのだ。エスキモーがわずか三時間で作ったイグルーは、ビニール布で四角い窓までつけられ、テントより明るく、暖かく、しかもどんな風にもビクともしなかった。このように優秀な家作りの腕を持つ人間を、私は文句なしにうらやましく思う。

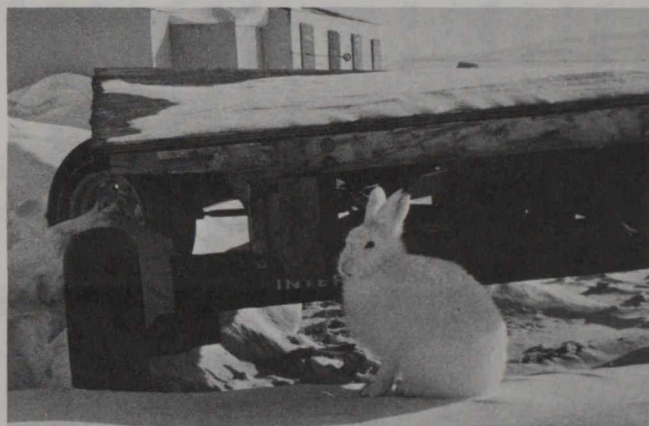
\*

\*

ノースウエスト準州の首都イエローナイフに滞在中、年に一度のお祭り、「カリブー・カーニバル」にぶつかった。広場でのダンスや力くらべ、ミス・カーニバルの選出、凍ったグレート・スレープ湖上の犬ぞりレースなど盛り沢山の行事が雪の中で繰り広げられたが、集まった人の出身国籍の多彩さに、あらためておどろく。この広い国のすみずみに、いろいろな国の人たちが入りこんでおり、その一人一人がカナダ人なのだという事実は何ともなく感心しながら、犬ぞりレースのスタート地点に行くと、観客の中から声をかけられた。日本語である。

ビクトリア島南端のケンブリッジ・ベイに行く途中の街道憲久氏だった。カナダ北極圏の人間に魅かれて八年。三回目の長期滞在となる今回は、思いきって夫と二人の幼い子をひき連れてやって来た。

「北極は、人が住んでいるからこそ好きなのです」と、二十九才の街道氏が言うのを聞きながら、思わず赤い頬をした三才と二才の兄妹の顔を見てしまう。確かに、一年間この子どもたちと共にする北極の村の生活は、大きな遠征隊のそれとは一味も二味も違うユニークな体験に



無人小屋の近くで見た白ウサギ。近づいても逃げなかった。

なるだろう。日本から家族ぐるみで、エスキモー村に入ろうとする発想が、ひどく新鮮に思われた。

その後、ケンブリッジ・ベイの友人宅に落ち着いた街道一家は、多くのエスキモー家族たちの助けで、北極圏の四季折々の生活を、楽しんでいららした。三才のダイスケも、二才のサチもエスキモーの子どもたちと一緒に組んずほぐれつもの戦斗的な日々を送っているようだ。

二十年以上、国家的スケールの観測活動が続いている南極に比べ、日本人にとって北極は縁の薄い所だと、私は思っていた。四百年以上に及ぶ北極探検史でも、日本人が顔を出すのは、例の白瀬中尉が南極以前に北極行を考えていたことぐらいである。

だが、街道さん一家の行動を見ると、北極圏がわれわれから隔絶された地域と

キメつけるのは、いささか早まった考えのようである。アラスカを含め、日本人がこの北の地域に足を踏み入れた歴史は決して古くはないにしても、そこには南極行きにはない、生活の匂いというようなものがある。たとえば、北の人たちと暮しを共にしながら、われわれは獣の毛皮がどんなに必要であるかを、裏返して言えば温帯地域ではそんなものはいかに無用であるかを、理解することができる。エスキモーは、いままスノー・スクーターを使ってアザラシやクマを追うが、北極で私が考えたことの一つは、人間とけもの共存ということであった。

この問題は、熱帯のアフリカでもすでに大きなテーマになっているが、一定の動物保護策の下で、北極ではよりオリジナルな形での狩りが、なお残っていると見えるだろう。アフリカのように、その狩りの何パーセントかはすでに異邦人の遊びに供されているとはいえ、人間とけもの関係の原点がここに存在する事実を、私は重視したい。

レゾリュートの三軒のエスキモーの家で、北極グマの毛皮が戸外に干してあるのを見た。航空機の最前線基地として開かれたこの新しい町の付近には、いままクマが出没する。滑走路をノソノソ歩いていた、などという話が、まれにでなくあるのだ。

カナダ北極圏が、日本人を含む外国人観光客により門戸を広げるのは、時間の問題だろう。できるなら、ツーリストもまた、クマの危険におびえ続けるような北極であってほしい、と私は願うのである。